かどうかといふことを調べて見るに、これも不幸得て居らない。

福田博士は苦痛と賃銀とを交換することが勞働だと前提し、『されば、其賃銀として受くる所の利用の方が、敢て甘受する所の苦痛てふ費用より大でなければならぬのであります。勞働は賃銀を得るための一の代價であります。代價として支拂ふ所よりも之に換へて得るものゝ方が、利用大であつて、其間に餘剩が生じなければ、一の經濟行爲として目的を達したものとは申されないのであります』と云ひ『經濟上の勞働とは或快樂、或利用を得んがために、其の代價として或苦痛を忍んで力作することを謂ふのでありまして、前既に段々説明致した通り、其の忍ぶ所の苦痛は之によりて受くる利用、快樂よりも常に小でなければならないのです。若し左樣でなく、苦痛の方が大であれば、我々は結局勞働に從事することによりて、却つて損を招くことになります。左樣なる損を招く勞働に從事するものはありません。』と斯樣に斷じて居られるが、私共は實際上に於ては、其の受くる所の利用、快樂より、其の蒙る苦痛の方が遙かに大きく、然も博士は『左樣な損な勞働に從事する者はありません』と言つて居られるが、事實私共は餓死を防ぐために敢て其の損な勞働に從事しつゝあるものではないか。

△過勞による享樂生活の破壞

私共は文明生活を求めんがために勞働をするのであるが、前に述